

ぼくらのワールドカップ・台湾遠征試合

ぼくらのワールドカップ実行委員会 松任谷愛介

1. はじめに

まず自己紹介から。私は松任谷愛介と申します。英国在住歴 27 年。音楽・映像・文化のプロデュースを生業にしており、ここに紹介する「ぼくらのワールドカップ」には、チャリティー活動の一環として関わっています。日本には松任谷と名の付く著名人が親族にいますので、私は静かに身を潜めながらロンドンライフを楽しんでいます。

ロンドンと日本の文化交流で忙しく、よもや台湾との結びつきができるとは思っていませんでしたが、縁とは不思議なもの。気がつけば数々のプロジェクトが台湾との間に生まれてきています。とはいえ台湾との係わりが始まってまだ 4 年程度の新参者。諸先輩を前に「交流」に 1 万字のスペースをいただくのは甚だ僭越ですが、お引受けした以上、楽しい旅行記を書き上げたいと思うのでお付き合い下さい。

2. スポーツ少年団「なかの FC」の到着

3 月 7 日、仙台発のエバ航空 117 便が桃園空港に到着しました。同乗するのは「なかの FC」の小学生 18 名、代表の千葉忠志さん、そしてご父兄と引率者、事務局の統括ならびにツアーのまとめ役の産経旅行浅田専務、先乗りして一行を待つ委員会関係者、合わせて総勢 40 名のグループです。初めての海外旅行、初めての飛行機に緊張気味の子どもたちが恐る恐る出てきました。これから 4 日間、「なかの FC」のちびっ子たちは「ぼくらのワールドカップ」優勝チームとして、日本の代表として、台湾で親善試合を繰り広げることとなり

ます。

この旅の主役「NPO 法人なかの FC」は、代表である千葉さんが昭和 62 年、仙台市宮城野区に小学生のサッカー育成を目的に設立した名門ジュニアサッカークラブで、県大会でも実績をあげています。歴代選手のなかには鹿島アントラーズの遠藤康選手の名前もあります。遠藤選手は定期的に子どもを激励に来てくれるそうです。

4 年前の東日本大震災で、津波はなかの FC 事務所まで押し寄せてきましたが、幸いにも大きな災害からは免れました。しかしチームの子どもたちの中には、親族を亡くされた子や、目の前で家が流されたのを見た子もおり、計り知れない悲しみを味わってきたことが推察されます。心優しき千葉代表は、4 年が経過した今でも震災の話になると涙を流して声を震わされます。記憶から消し去ることのできない大事、経験していない外がわの人間には、ただただ同情することしかできません。

さて、「なかの FC」の台湾遠征。2014 年 11 月に開催された「ぼくらのワールドカップ多賀城大会」で競合チームを蹴散らして見事優勝を勝ち取ったことから始まります。「ぼくらのワールドカップ」とは何か。

3. ぼくらのワールドカップ？

多文化共生社会の実現を目指して、日本に住む多国籍の子どもたちの交流を、フットボールと音楽を通じて実践するチャリティーイベント、それが「ぼくらのワールドカップ」です。2010 年に滋賀県南草津市で開催されて以来、滋賀県草津市



(ぼくらのワールドカップ大会の様子)

(2011年)、群馬県太田市(2012年)、栃木県足利市(2013年)、そして宮城県多賀城市(2014年)と、5年に渡って継続してきました。日本人の子どもたち、日本に住む外国籍の子どもたちが分け隔てなく、共通言語であるサッカーと音楽で友情を育くもうという試みで、筆者が立命館大学経営学部でスカイプ通信で講義を持っていた時に、学生とともに作り上げた企画です。最初の2年は立命館大学の学生主導で進めましたが、所詮学生は就職して散らばってしまいます。あまりにも良い企画なので、2012年からは筆者が引き取って継続することにしました。

背景にあるのは共生社会の実現です。

日本には200万人を超える在日外国人が暮していますが、少子化社会に向かう日本が現状を維持するためには外国人労働力での増強は急務です。にもかかわらず、それを前提とした多文化共生社会のインフラ整備が整っていないのではないかという危惧。日本は外国人にとって住みやすい国だろうか？ 外国人が楽しく暮せる共生社会のフレームワークはあるだろうか？ 街に職場に社会に、偏見や差別などが無いだろうか？ こうした疑問が起点となっています。

「ぼくらのワールドカップ」は、日本に住む国籍の違う子どもたちに、ことばや文化、考え方の違いを乗り越え、フットボールと音楽を通じて、地域コミュニティーに友情の輪を広げていくことを目指すチャリティー活動として創設されました。

そしていくつかの理念を持ちます。

<つながるイベント>

国籍に分け隔てなく、子どもたちのお父さんお母さんが働く工場が主体的に協賛し、同僚やスタッフが多数、応援に駆けつけて、商店街の人々が食べ物を持ち込んでくれるような地域イベントを実施することです。たとえば群馬県屈指の工業地帯太田市や隣町の大泉町にはブラジル人ペルー人など多くの外国人が住んでおり、大泉町の場合、全人口の14%を占めるといわれています。受け入れ当初は大歓迎された彼らも、事件や事故を経たことも災いして、今や日本人コミュニティーとの間に見えない境界線が出来てしまっています。垣根を越えた子どもたちの友情が、大人が作ったバリアを取り外してくれるのではないのでしょうか。

<地域のイベント>

イベントがあるから都心に集まれという高飛車な態度でなく、サッカーと音楽が必要な子どもたちが居れば、日本中どこにでも飛んでいこうではないかというスタンスです。第一回大会に参加してくれた近所に住むペルー人の女の子の何人かは運動靴を持っていませんでした。素足で楽しそうに走り回るその子らを見ているうちに、このイベントは日本の隅々で開催しなければいけないと思うに至りました。



(第1回ぼくらのワールドカップより)

<皆のイベント>

「ぼくらのワールドカップ」は、サッカー大会だけでなく音楽にも傾注してまいりました。趣旨に賛同するアーティストに東京や大阪から参加して、仮設ステージで歌います。太田大会には著名なラッパー「GAKU-MC」、足利大会には「球舞」と「リンダ III 世」、そして多賀城大会では、ユニバーサルミュージックの「USAGI」他、地元7グループに来てもらいました。音楽の力は大きく、

子どもたちは試合では味わえない横のつながりをもって音楽に聴き入ります。今後も継続したいと思います。

ぼくらのワールドカップが始まって4年。毎年、場所を変えて実施してまいりましたが、参加者、観戦者は回を増すごとに増えおり、ようやく少年サッカーの定例イベントとして認知された観があります。(別表 大会実績をご参照下さい)

ぼくらのワールドカップ
これまでの大会実績

ぼくらのワールドカップ第一回大会	
日時	2010年10月10日
場所	立命館大学運動場(奈良県橿原市)
参加者	フジテレビメンバー、目黒サッカークラブ、観音150名
観戦チーム	ラッキー(学園)ブラジル
アトラクション	M/D 戦隊パフォーマンズ、ダンス交換
主催	ぼくらのワールドカップ実行委員会
協賛	立命館大学体育学部
後援	大塚市・橿原市・長浜市・河内市・守山市・奈良市各教育委員会
協力	なし
協力	びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部、M/D びわこ成蹊、松川豊穂、村田敏作
協力	サッカー部
ぼくらのワールドカップ第二回大会	
日時	2011年10月15日(土)
場所	多賀城文化会館新校舎(奈良県多賀城町)
参加者	8校団12チーム、参加者約200名
観戦チーム	北沢学園(日本)
アトラクション	外国人学校以上6チーム/バンド、ダンスのパフォーマンス
主催	ぼくらのワールドカップ実行委員会
協賛	大塚市教育委員会
後援	23ハジリヤス、サントリー、スーパーボールセピア
協力	びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部
協力	なし
ぼくらのワールドカップ第三回大会	
日時	2012年11月24日(土)
場所	太田市陸橋スポーツ広場
参加者	10校団30チーム、参加者約300名
観戦	1000人
主催	ぼくらのワールドカップ実行委員会
協賛	群馬県太田市 / 運営協力 群馬県立大学
後援	群馬県太田市、群馬県立文化スポーツ振興財団、大泉町、公益財団法人大泉町スポーツ文化振興事業団、大泉町商工会、太田市観光協会、大泉町観光協会、国土交通省観光庁、駐日アメリカン文化センター大使館、在日ペルー大使館、駐日ブラジル大使館 / 運営協力 群馬県立大学、ダンスパフォーマンズ株式会社
協力	びわこ成蹊スポーツ大学サッカー部
協力	なし
協力	なし
協力	なし

ぼくらのワールドカップ第四回大会	
日時	2013年6月30日(日)
場所	足利市五十嵐運動公園
参加者	12校団48チーム、参加者約400名
観戦	3000人
主催	ぼくらのワールドカップ実行委員会
協賛	足利市サッカー協会
後援	栃木県足利市、足利市教育委員会、足利市多目的文化スポーツ財団、足利商工会、足利市観光協会、国土交通省観光庁、日本赤十字社、駐日アメリカン文化センター大使館、在日ペルー大使館、フランス大使館、メキシコ大使館、クオアチア大使館、アメリカン大使館、台北経済文化代表処、リソコ、三越、東横
ゲスト	塩原聖典、パンプ・ダンスグループ、舞台舞踊多賀城、豊田愛理、塩原聖典、リソコ、23ハジリヤス、株式会社KST、株式会社ビーエー、セガサミーホームデザインズ株式会社、株式会社カネホ、株式会社リスベック、株式会社イーストサウンド、株式会社ダイスケデザイン、株式会社、全日本運輸株式会社、ホタルサクラファーム青山、カワモトアス株式会社、台湾日本文化、財団法人真善美公益基金、エー・ピー・株式株式会社、深尾執行株式会社
協力	なし
協力	なし
ぼくらのワールドカップ第五回大会	
日時	2014年11月3日
場所	仙台市青葉区多賀城キヤンパス
参加者	42チーム、参加者約400名
観戦	3000人
主催	ぼくらのワールドカップ実行委員会
協賛	学校法人仙台青葉学園
後援	NPD法人、国土交通省観光庁、青森県、多賀城町、多賀城市教育委員会、公益財団法人交流協会、台北経済文化代表処、在日文化経済交流協会、台湾公益基金、中華甲子園振興会
協力	学校法人仙台青葉学園、株式会社カワムラ、株式会社青葉ファーム、株式会社工務製作所、株式会社ナノグレインズ、B/W/G/ガラスの皿、株式会社ビーエー、株式会社エイワ、深尾執行株式会社、セガサミーグループ、株式会社カネホ、株式会社リスベック、ホタルサクラファーム青山、カワモトアス株式会社、グラッドファーマーグループ実行委員会、セガサミー、仙台交響楽、株式会社クララ、レオパレス株式会社、株式会社エックソン、本田印刷株式会社、株式会社オートサービスズ、青森県観光振興機構、青森県観光クラブ、早川運動器具店、株式会社中村スポーツ、スポーツショップ、朝日新聞株式会社、宮原動物病院、慶信堂、青森県観光センター、工業系内田クリニック、内巻通内包店、ホタル大使、福島県林業振興会、小幡紀枝様
協力	フニー仙台PC 東北文化振興会、B/S/D Promotion 風のミュージアム、中野実小学校、ユニバーサルミュージック合同会社、仙台市青葉区南郷中学校サッカー部

4. ぼくらのワールドカップと台湾

2012年ぼくらのワールドカップ太田大会から、小学校上級生（12歳以下の部）優勝チームの台湾遠征が始まりました。今年で3回目となります。台湾の子どもたちとサッカー親善試合を通じて国際交流をはかる企画です。なぜ台湾になったかといえば、当時ある別件プロジェクトが台湾で進んでいたことありますが、決め手となったのは、世話になる産経旅行の浅田先輩が「松任谷さん、行くなら台湾です」と強く薦められたことです。ご存知のとおり台湾は野球大国であり、サッカーはスタートしたばかり。委員会には「えっ台湾？」「親善試合できるサッカーチームが居るの？」との危惧もありましたが、取り越し苦労でした。サッカーの普及定着は早く、現在ほとんどの学校にサッカー部が存在しており、どんどん強くなっているのが現状です。

台湾遠征は大きな魅力です。「ぼくらのワールドカップで優勝すれば台湾に行ける」という評判は各地に広まり、それまで以上に参加者が増え、熱い試合が展開されるようになりました。素足で走り回っていたペルー人の女の子たちの精神（分け隔てなく楽しむという精神）はU-9（小学校低学年）の部で実現して、U-12（高学年）ではより真剣勝負を行うという2本建てになりました。

5. 東日本大震災と宮城県多賀城市大会

子どもたちにとって、おそらく初めてとなる海外旅行を心温まる台湾で経験することは非常に意義があります。東日本大震災以来、台湾と日本の心の絆はさらに深まりました。3年前に台湾で開催された震災追悼イベントに足利の優勝チームの子どもたちと共にオブザーバー参加した際、台湾の方々の慈悲深い眼差しに感銘を受けました。せっかく招待するのなら被災地の子どもたちを連れていけないだろうか。ならば被災地で大会を開

催して、毎年変わらぬ応援をしてくれる台湾の人たちに、被災した子どもたちから「謝々」という言葉を伝えたいという思いが強くなり、2014年大会は、それまで外国籍の子供が多い地域での開催としていたものを方向修正して、被災地域の子供たちが参加する大会として実施することに決定、宮城県多賀城市での開催となりました。

開催にあたっては、台湾とも縁の深い仙台育英学園様大変お世話になりました。加藤理事長のご厚意で、大会会場として同校の多賀城キャンパスを提供のみならず、男子女子サッカー部員の動員、マーチングバンドやチアリーダー、太鼓グループなど、全面的なバックアップで学園祭並みの賑わいを演出していただきました。

多賀城大会は、宮城県沿岸部の小学校やクラブチームの大会となり、40チームが出場。参加地域は亘理町、岩沼市、名取市、若林区、宮城野区、多賀城市、七ヶ浜町、塩竈市、松島町、東松島市・石巻市・女川町・南三陸町・気仙沼市の各市町村です（別添 分布図をご参照下さい）。津波による被災地のサッカー少年たちが一同に会する初の試みとなり、関係者一同、身の引き締まる思いで、子どもたちを迎えました。

観光庁、宮城県、多賀城市、同教育委員会など、行政をはじめとして、多くの地元企業や地域コミュニティ、また趣旨に賛同する域外の企業及び個人の協力がありました。先に述べた仙台育英学園を筆頭に、ソニーFCは隣接するサッカーグラウンドの貸出しを、セガサミーはゲーム機を、クリクラは会場の飲料水を、伊東伸一氏は子どもたち全員分のおにぎりを、また釜石のエイワ様からは「ぼくらのワールドカップ」初めてとなる素敵なカップをご提供いただきました。その中で台湾遠征親善試合のチケットを勝ち取ったのが宮城野区の「なかのFC」です。

台湾遠征にあたり、ひとつ不安がありました。子どもたちの大多数は被災者であり、多くの不幸



(写真キャプション：ほくらのワールドカップ多賀城大会の様子)



を経験しています。その子たちに日本の親善大使を務めてもらっても良いのだろうか、言葉は悪いですが見せ物になってしまうのだろうか、4周年を迎える被災地の大切な時期に留守にしても良いのだろうか、との迷いです。しかし台湾側のお心遣い、そして何よりも台湾での子どもたちの笑顔を見て、取り越し苦労と判りました。

次回大会は、このコンセプトを継続し、岩手県沿岸部、大船渡市での開催を準備中です。毎年、異なる地域の子どもたちが台湾に行き、温かさに

触れて、素晴らしい思い出を持って帰国します。台湾にも感謝と友情を伝え続けていければ、有意義なことだと感じます。

6. なかのFC 奮闘記

以下、台湾遠征のポイントを写真を交えながらご紹介します。

1) 合同練習

到着の翌日 2015年3月8日は朝から天母運動公園にて合同練習。天気良好。3月初旬なのに汗が噴き出すくらい暑い日差し。子どもたちは早朝から天然芝の上で、ASA サッカースクールの子どもたちとともに練習。あいにく上級生チームの姿がなく、対抗戦は実現しませんでした。和気あいあいと合同練習に励みました。



2) 台湾の小学校との親善試合

3月9日。いよいよ台湾に来て最初の交流試合です。対戦相手は台北市立士林区士東国民小学校サッカー部。中学生も混じっていたため体格では我がなかのFCを大きく上回り、脅威の相手に不安がつるなかのFC。しかし試合はほぼ互角。ファインプレーの連続で、接戦の末、なかのFCが勝利しました。試合の後は握手して、肩を組み合っ、お互いを讃え合っていました。子どもたちは本当に仲良くなるのが早いです。

校の子どもたち、先生と一部ご父兄も混ざって、私たちを笑顔で迎えてくれました。なかのFCの子どもたちは台湾チームの子どもたちと向き合って座り、わざわざ用意してくれたランチボックスをいただきました。始めは言葉の壁でまったく会話がありませんでしたが、あっという間に溶け込めるようになっていました。言葉が通じなくても友だちになれるのは子どもの特権かもしれません。バスに乗り込む私たちを名残惜しそうな仕草で見守る台湾の子どもたち。遠く見えなくなるまで手を降り続けてくれました。

3) ランチ

小学校から食事をお招きいただきました。小学



4) 台湾日本人学校との親善試合

台湾の小学校とは趣の異なる近代的な小学校でした。ここでも子どもたちに迎えられ、待ちきれない様子で練習開始。あっという間に試合が始まりました。ここはクラブで鍛えているなかのFC



が少しだけ優勢となりました。コミュニケーションも日本語。和気あいあいの雰囲気を楽しみました。

5) 台湾政府外交部表敬訪問

外交部周副司長と顧科長のご出席を賜りました。子どもたちにとって、このような公式な場を訪れるのは初めての経験で、少々緊張気味の様子。偉い先生方からの質問にたじたじとなりながらも、しっかり外交大使役を勤め上げ、良い経験になりました。



6) 観光

駆け足での観光となりましたが、とくに故宮博物院では目玉の白菜と豚の角煮に出会い、緻密さとスケールの大きさにビックリ。台湾の歴史を知る良い機会となりました。行天宮も真面目に見学。ご父兄は残り少なくなった旅の思い出にお土産を漁っていました。



7) 食事について

子どもたちにとって台湾での食事は天下一品だったようです。初日夜は梅子での会食。初めてのレセプションに少々緊張気味でしたが、朝から体を動かしたこともあり、台湾料理を目の前にして驚喜。すっかり童心に戻っていました。大いに盛り上がる歓迎会レセプションとなりました。翌日は台湾風バイキング。とくに肉と野菜をボールにとって、それを焼いてもらう料理が大人気で、子どもたちは何度もおかわりをして、満腹になっていました。その後も美味しい食事が続き、台湾の美食が決定的になったのが鼎泰豊の小籠包でした。

10日のレセプションでは、公式日程すべて終了で子どもたちも完全にリラックス。はしゃぎまわり、最後の台湾の夜を楽しみました。

総じて、子どもたちは台湾を大いに楽しんだ様子です。「食事がおいしい」「とくに小籠包」「とて

も親切な人たち」「すぐに友達になれた」「ぜんぜん危険じゃなく見える」「町がきれい」など。一方で「言葉が通じないのは大変」「町が汚い」「ホテルがきれいじゃない」「コンビニの中の匂いがイヤ」などのコメントもありました。ご父兄のほうは余暇を見つけてお買物。足ツボマッサージに足しげく通われる方もおり、子どもとは別の楽しみを味わっていました。

7. バナナ

筆者と台湾を結びつけたのはバナナです。数年前、北九州市門司で開かれている門司港ハーバーデッキジャズフェスティバルに立ち寄った時、ジャズマンたちが「バナちゃんブギ！」という曲を演奏していました。ノリの良いブギウギですが良く聴いていると歌詞が面白く、客席も異様なくらいノリまくっている。

「生まれは台湾台中の、阿里山麓（ありさんふもと）のCountry Town、台湾娘に追われ、唐丸籠にRun Away、ガタゴトお汽車に揺られ、着いたよ基隆港・・・金波銀波を超えて、艱難辛苦（かんなんしんく）の後に、ようやく着いたよ門司港、ようこそバナちゃん！ 嬉し～（バナナナ～ナ）おいし～（バナナナ～ナ）楽し～（バナナナ～ナ）バナナの荷揚げ・・・」と続きます。

プロデューサーの勘で、この歌に大変興味が湧き、作曲者のホリホリさんを訪ねました。彼によれば、門司港はバナナの叩き売りの発祥の地。北九州市では明治から残る港の景観を門司港レトロ

と位置付けてインバウンド振興に励んでおり、明治時代に台湾から初めて荷揚げされた台湾バナナはまさに門司港の歴史・文化の象徴である。そこで、叩き売りに使われてきた



口上をのせたブギウギの作曲を思い付いたと言うのです。

周辺をリサーチする中で、いくつかの興味深い事実が判明。

- 1) 明治から伝わるバナナの叩き売りは無形文化財的価値があるものの、「保存会」の保存伝承の努力にもかかわらず、後継者が見付からず危機に瀕している。
- 2) 北九州市は「門司港レトロ」をひとつの目玉に観光客誘致を進めているが、近年は台湾からの観光客が最も多いが、観光資源では今ひとつ盛り上がりには欠けている。
- 3) かつて果物の王様といわれた台湾バナナの日本でのマーケットシェアはなんと！0.5%まで低下してしまっている。

この由々しき事態を解決するため、かくして「バナちゃんブギ！プロジェクト」が北九州市に発足しました。波止場ナナ&バナナスターズが結成され「バナちゃんブギ！」のレコーディング。CDは2年前、日本と台湾で発売され、日本各地と台湾での演奏活動も実施中。去年はバナちゃんこと波止場ナナが北九州市の親善大使に任命されて、市との結びつきがさらに深まり、現在は「バナちゃんマンボ」「月夜のバナちゃん」「マンゴー畑」「台湾ランチ」など、バナちゃん新曲が続々登場、「バナちゃんブギ！」アニメ化の話が進んでいます。

一方、台湾バナナの復権はというと目覚ましい進展がありません。業者を片っ端から当たりましたが、「確かに美味しいんだけどねえ、マーケットがない」「台湾バナナは終わったよ」「台湾側も今はマンゴーでしょ」「高過ぎるから無理」と、バナちゃんとタイアップして新たなブランドを創るといふ夢みたいな話には乗ってきません。某国の、大きいだけで固くて香りのないバナナが主流となったことが子どもたちのバナナ離れの原因ではないかと筆者は思うのです。甘くてネットリ

日本でのライブ



台南ライブ



感のある台湾バナナが日本の子どもたちの手に届かないことは残念です。台湾バナナを救いたいと思われる方がいらっしゃったら力を貸してください。

脱線しました。本題に戻すと、台湾遠征旅行のバスの中で、なかのFCの子供たちに「台湾バナナを食べたことがある？」と聞きましたが、誰ひとりとして台湾バナナを知りませんでした。さっそく次の休憩地点で果物露天商からバナナを購入、試食してもらいました。予想どおり子どもたちは、こんなに甘くて美味しいバナナは食べたことがないと感動。その後バスの中でバナチャンブギ！を一緒に歌いながら、楽しいひと時を過ごしました。そしてバナチャンブギ！は日本人学校の子供たちを招いての最後の晩餐会でも歌われていました。なかのFCの子どもたちは実にエンターテイナー揃いで、筆者が持っていた“東北人は内向的性格”というイメージは完全に覆されました。

8. 改善点

今後の改善点について述べさせていただきます。

1) 事前準備を早めに開始。

とくに台湾はもっとも人気の高い観光地となっており、格安航空券は年々取りにくくなっている状況があります。遠征参加者がなかなか決まらないという実情もありますが、来年はもう少し早く段取りを進めていきたいと思います。

2) 対戦相手を選ぶ

同じことは訪問する台湾側の学校選びにも言えます。訪問の趣旨をご理解いただき、両国の子どもたちがもっと接近できるような仕掛けを考えなければいけません。食事だけでなく、室内でゲームをやるとか、音楽を聴くとか、壁を越える努力が必要です。

3) 地域を台北郊外にも広げる

子どもたちには、台北市だけでなく、郊外（たとえば台南、高雄）にも連れていき台湾の別の面を見せたいと思います。

4) 宣伝の充実

現地でのメディア広報活動にも力を入れる必要

を痛感します。イベントがメディアで台湾域内に伝えられれば、大会の認知度を高めるだけでなく、日台の文化交流、さらに台湾に於ける青少年サッカー振興につながるからです。

今回の台湾遠征で、実現しなかったことがあります。

台湾日本人会主催 311 東日本大震災追悼感恩会に子どもたちを参加させなかったことです。一部ご父兄の苦言に基づき、子どもたちの参加を見合わせることにし、引率者のみの参加としました。会場では子どもたちにスポットライトが当たる段取りまで演出されていたので、主催者ならびに関係者様のご期待に応えることができず、また被災地を代表して「謝々、台湾」というメッセージを会場で伝えることができなかつたことを残念に思います。しかし被災地の人々、とくに子どもたちの感じることは、4年が経過したとはいえ外部者には計り知ることはできず、ご父兄の意見に従って見送りとした次第です。なお台湾の人に僕達からの感謝の気持ちを伝えるに行くべきだと言ってくれた子も何人も居たことを追記させていただきます。

9. 支援

台湾遠征実施にあたり交流協会には3年前より後援を頂いています。杜萬全慈善公益基金会（代表 DAVID TU 氏）には台湾遠征初年度からご支援を頂戴しています。また亜東関係協会/台北経済文化代表処からも台湾側の対戦小学校の選定など温かいご支援を頂戴し、毎年表敬訪問させていただくことが慣しとなっています。また台湾日本人会の皆様、日本人学校の皆様にも、短期訪問にも係わ



らず、毎年厚いおもてなしをいただいています。今後も灯した火を絶やすことなく、体力資力の続く限りイベントを継続実行して参りますので、ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

10. 成果報告に代えて

最後に、本プロジェクトの成果報告に代えて、ロンドンに届いた子どもたちからの心温まる手紙を紹介させていただきます。

まつとうやさんへ

今回の台湾遠征ではいろいろなことを手伝っていただきありがとうございました。台湾の人と日本人学校の人とサッカーが出来て楽しかったです。台湾の人とサッカーをして自分達と違うところがいろいろと学びました。ぼくらのワールドカップという大会がなかったら僕達は台湾にいけなかったのが良かったです。今回の台湾遠征は楽しかったです。ありがとうございました。（5年生）

松任谷様

台湾遠征では大変お世話になりました。ぼくはサッカーは言葉が通じなくても、パスを出すことで通じ合えることを知りました。サッカーは世界の言葉だと思いました。大好きなサッカーをもっともっとうまくなる様子ががんばります。日本人学校のみなさんとの夕食会ではみんなが一つになり歌ったり笑ったり、とても楽しい時間でした。このような貴重な体験ができて本当によかったです。ありがとうございました。（5年生）

松任谷さんへ

ぼくらのワールドカップを宮城県で開催していただきありがとうございます。台湾遠征はとてもいい経験になりました。この経験をいかしこれからもサッカーをがんばりたいです。（3年生）

まつとうやさんへ

この度は素晴らしい遠征を主催して頂きありがとうございます。台湾遠征ではとても良い経験をさせて頂きました。この経験を生かし、中学校では勉強とサッカーをがんばります。(6年生)

松任谷さんへ

ぼくらのワールドカップで優勝して台湾えんせいをさせていただきありがとうございます。ぼくが一番楽しかったのは台湾の日本人学校にいる子たちと試合をしてその後にした食事会です。松任谷さんのバイオリンの音もすてきでした。ぼくらのワールドカップを通じて台湾にも新しい友達ができました。これからも色々な楽しいフェスティバルをきかしてくください。(6年生)

松任谷さんへ

台湾ではありがとうございました。ぼくはみんなとご飯を食べた時に松任谷さんのバイオリンに感動しました。これからもぼくは夢に向かってがんばります。松任谷さんも身体に気をつけて。お元気で。(6年生)

松任谷さんへ

台湾でよい経験ができました。ありがとうございました。ぼくは初めて外国に行って、色々なことを知りました。例えば、サッカーでは台湾のサッカーチームの人と対戦して、外国のチームとのレベルの差を確かめました。台湾の人の生活の様子を生で体験することができました。本当にありがとうございました。(6年生)

松任谷様

先日は台湾までご招待頂き本当にありがとうございます御座いました。大勢で参加致し、たくさんの楽しい一生の思い出を作りました。子供達は初めての海外遠征体験になり、台湾と日本人学校のサッカー少年との交流をふまえて、帰った時は少し大人になったように見えました。きっと心の中に宝物が増えたと思います。参加した子供達は3月20日小学校の卒業式を迎え、皆様への感謝の気持ちと思いやり、いたわりの心を持って、大人に育っていくと思います。本当にありがとうございます御座いました。心より感謝申し上げます。(なかのFC 千葉忠志)

